
ヴァルター・ベンヤミンの後期思想における「慣れ」の意義——現代の注意力との比較より

木戸吉則(京都大学)

ヴァルター・ベンヤミンは「複製技術時代の芸術作品」などの論考で近代的な主体の危機として、「気の散った状態での受容」、すなわち「気散じ *Zerstreuung*」という知覚形式に注目している。注意を特定の範囲へ限定して払う「集中 *Sammulung*」とは対照的に、気散じは注意を拡散させるもので、複製技術時代以後の主たる知覚形式に位置付けられる。ベンヤミンは、気散じが可能となるのは「慣れ *Gewöhnung*」においてであるとしているが、慣れに至る契機は記述されていない。ベンヤミンの著作に現れる、二種類の相異なる知覚形式について、それらは常に併存関係にあるのではないかと指摘する議論もあるが(cf. Liska *Walter Benjamins Dialektik der Aufmerksamkeit*, 2001)、そこでも慣れが生じる契機については不明である。

知覚形式の対照的な性質については、現代の心理学などの研究においても、ベンヤミンのものと似た図式で議論がなされてきた。たとえばヘイルズは、メディア環境の多様化に応じて、注意をディープアテンションとハイパーアテンションとに区別した(cf. Hayles *Hyper and Deep attention*, 2007)。前者は集中に該当し、「一つの媒体において表象される複雑な問題の解決において優れた」注意であり、後者は気散じに近く、「多数の焦点が注意を競い合うような、急速に変化する環境との交渉に優れている」注意である。またディープアテンションは周辺環境への柔軟な応答を、ハイパーアテンションは複雑でかつ非-インタラクティブなものへ長時間焦点を当てることを不得手としている。ヘイルズは明確な結論を出してはいないが、両者は最終的には補い合うように統合し得るという展望を述べている。以上を受けて、本発表は、慣れを集中と気散じが適度に切り替え得る状態として定義付け、両者の統合の可能性を提示する。

本発表では、慣れは対象への知覚と、対象と主体が置かれている環境という全体性のイメージを構築する視点が両立する状態であり、その状態こそが二種類の相異なる知覚形式の統合であると主張する。それを示すために、クレアリーが知覚形式としての注意の裏に、「諸力や権力構造の効果」を指摘したことに依拠し(cf. Crary *Suspension of Perception*, 1999)、ベンヤミンが、プロパガンダなどに潜む権力構造を念頭に置き、大衆に特定の対象に集中することを要請する構造への抵抗として気散じを評価した点に注目する。政治が美学化され、大衆を美的関心によって組織しようとするファシズムに抗するとき、関心を拡散する気散じは有効だと考えられたのだ。だがベンヤミンは、集中と同様に、慣れにも批判的な視線を向けている。というのも、慣れは、諸力や権力構造に順応し、肯定する危険を孕んでいるからだ。以上のような政治的戦略と類比させ、ベンヤミンにおける慣れは、単に時間経過に伴い自然と生じるものではなく、相異なる二種類の知覚形式が切り替え可能となる状態であることを示す。そのような意味での慣れは、権力構造によって構成される注意の外部を、全体性において示すことに寄与する。